2378
23
13

へ 13
2378
23

山東京山作　勝春亭川　圖

全六冊　合二冊

# 女鉢木

庚午春梓行

版元錦森堂

旧詩一則書代叙言

稗史細精年競奇只因戯語立
端基閑囲春雨生眠日寒室秋
霄結閑時展覽偏憐忠義志沈
陰渓惡姦曲為耳熟嬰兒知尽
路自異箋娘之語郷

山東京山題

## 前編大意

袖打拂ふかげもなき雪の庵に親子主従がうく寄て仇敵の吳つるうち
此返報に行合て紀河原の怪物どもをうちぬく證據の一軸中にあぐ
封じ多の使いきるも禿の枝打ち[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]が昼ときき哀とのこを採の[illegible]
その親里と尋ぬバ此木の[illegible]

十八丁目ヨリ　山本九内が傳を記す

西曹相撲
力角力
浪華の女侠　嶋のおかん
餘黨射
競強
敵強
面面
津の国小町塚ふまる　浪人　山本九内

## 後編趣向

雪打拂ひて見バ昔ながらの花の[illegible]に親子兄弟が今茲に身賣の刃の代此恩
賞に相公の仁心に感ぜし神の[illegible]繩斬らるゝ忠義の片腕　襟に冷やく
遠近の使いきるも奴の赤軍　[illegible]助二人が魂立興言とかりて
旧里の家産その隠家に素ぬバ此書

三ケの抄ヨリ　嶋のおんが話述る

何方か
博奕の手
物と飾てハ
錆たれども
長光の一腰ハ
船橋二郎左エ門
が重代の業
の長ハその
花街の
噂咤
巷説

船橋二郎左エ門
近めの玉豊の
家かろの
身も
むしの袴の
杉目う菊

此地ハ秘蔵の
女房を持てハ
痩られども八ツ橋が
揚や入の
道中そぐる
是ハその
菱川
師宣
浮繪の
評判記

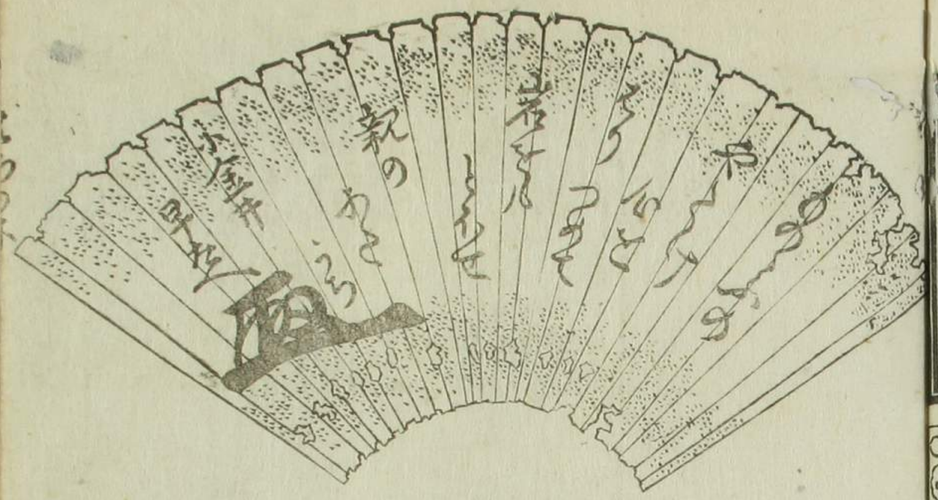


眉書
眉黛奪
將萱草
色紅裙
妬殺石
榴花

やの八ツ橋
太夫

八ツ橋禿 枝折

彼一朋ふ
年来の
本望とぞけそひ
断られども
赦免状
自筆の
是ハ
玉之家の
あるじ



吉祥天女像

瑤琴祈吉

筆硯萬福

今ハ昔北条高時乃ころおさまる天和の頃に鎌倉の
家司玉豊貢之助乃家臣に平作左司丸といつ
ものゝ一人の娘ありのくふ女とゝなりしもかさねかし
二八乃春ぎかり月のまゆをみうくしくてまさりける
むかしくもかゝ人をかひをかけざるはあまりなりある
ところよくもと示しらせてみやらしれぬりを
やりしハかのころ道りなくにそれみるくの女なりぞ
きぬいとも有るべきにかのかきうらへ男ゆきうちめ
むすめなれバありのあをかりいはてかのかゝいとろを
おそれひと夜さけいきろ杉のまえにてとおくへし
ふけうせなり此ゆ涯一家中にかくれなききなりとく
いひゆりきといひものゝふの乃うゝけいあらそれ乃
むをめありのそてとかしとありのあそびのよりし
中のちるの有りかなりそれが中に浅原源太と
いふ者のんのこ侍のかさ総つまれせんと思ひこれ
左司丸濃門にこれが心ごそのめしかときかひそくしん
せざりしがほをかへ不をとらえさうてそのの
せんかたつきむすめかさだめハわるよろうべきさ
のぞみありそれゆへむかとせてらぞえ多んかくせ
つけかさどは当りもとこらりされバ源太もとの
ごとくぞきてせんかたなくそのまゝにおもひたなり
ひかさいれのちにあまのおりんとあのりぞくそく
あるてことを象くぞうみてあるべし

こゝに又ろうぎの助とのかし
猿ぐ刻さえ見ゆとよ入りの
早をとらへりのあり、いきさつ
ぬれつれどもうまれつきてち
みんなあやへさえ十八さんの
ぶけのことくそうしれ一家中の
ゑれが
ふ
けの
と
おかざろへなりなりかうなれバ
ろうぎの助めしとぢてそれにちく
せつくりのあひやくやおこりやくを
やつけんとおもひのたまひあり

「ちゝきてうく

かくて
あるよ
早を
ろうぎの
めのともして
おくてんふいてる
らりくてるひ
かの
この
ふり袖
をきう
二八ばかりの
あんかとの
さぶれなたちて
あやとやく
見へあれざる女なれバ
ろうぎの助あやしとおもひ
あんぢへるふるあるぞと
こまらけあひし に△

△この女
ひろと
ゆり
ろうぎの助が
みれを見て
めさくし
かひさる
もんおや
ぐらん
その
内まで
さけ
さもおそ
ろしき
さけさ
あり
から

うぐいす
庄司左門
源義経
大のしん


ゆとの姫
源義経
大のしん
むねん
ぐる
多田早太

大のん

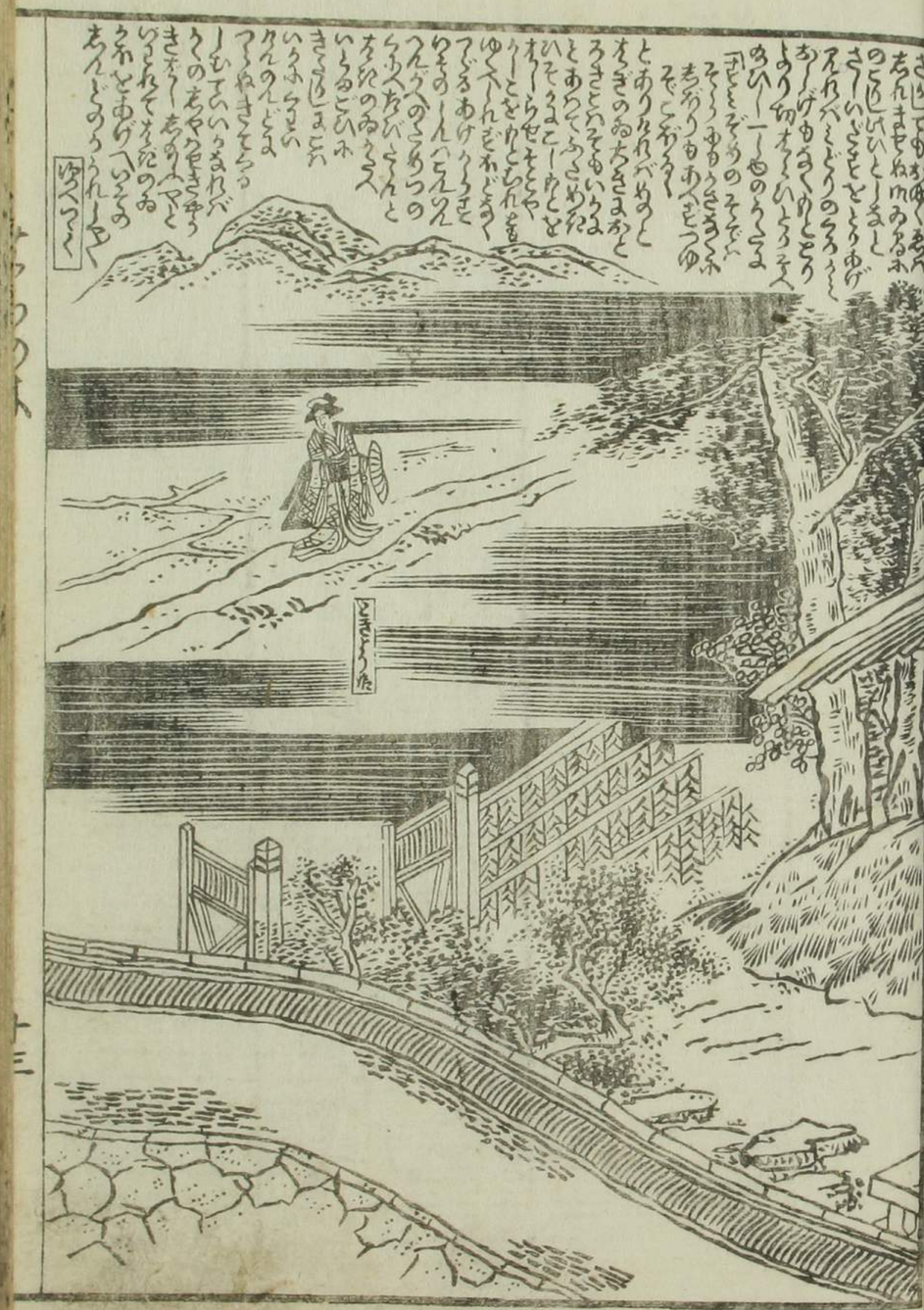
大のしんひざをとめそれにつきさでんにゝあこうた一義あり
きでんをやをとりうちにゐ一たまうぐうれがちまぢかまて
あづきあげうのりこをとうびひうつれらにあえ多人
うのあづきあげうのくさをうゝくのぞこゐりゝにに
オやたりわさにをこされてざんれんゐりゝとうふに
源義たうちうみづきいうにもうびひとうて
かのををうぐくのれいにおうぐゝとたぐのに
あじと云ゝあわせぐれのうみひうとも
りげやへうりうのうをうをりちひて
ふぢ有とうり源義を武田新左うの
あんどうちうりおのれがうんつきの
ふづうちぐのうをうにおとうて
うちうの紀ろるにあんのぐうく
をやたうをにうちのねうひを
うそゝにうぎ乃姫
さうそゝくきてぐげ
おつてうちあれせう
あふきに一めの
うをとうきて
あやめんぐやうの
うりにあうる
うのうをに
「あのくふの
やけ山を
たうつめて
岩ををこかせ
あやうあぐうち

○かくてやちいあぐのうをのあんをともにつれ
うをうちのかどでをゝゐゐにゐうけるに
とあるまううげにて源義をにゆにゆひ
なのりかけてうつをかくうんとするに
源義を大小をあげうぐ
へいうくゐ　いうにも
庄司新左うを
うちたるあげんゐり
りれひとところにて
ちんぐぎうのせをぶ
うをんとんやへども
ぢをうをこうを武かゝぐ
さむゝひらゝくうをれうゝ
こうにゐゝひうれうゝ
おりふゐり武ゐ八つ尾の
をんうをんぐいのりゐがの
ぢをうぶんうれいぐをうゝめに
とぐけ玉いれとごぐびもぐゝ
いひうれいぐをやたも源義たぐ
うるびれざうをかんゝんゐ
二人のゝゝいに源義ををあげ
うのをんぐをん代のうゐぐぞのへうのうゝを
ましあげうり つさてもをやた八つの尾ちんぐを
うゐのをさいをまうしのぐ主人ようゆうゝとうけうる
のうゐがこれをきうれ玉をよゝつぎの助がけうれとあれいとひとをうりにふをうゝひぐう
うの玉をとうぐの助がいりとを紀よりひゐうりゐがぐゝつぐせぐれといひゐがけあれが
まうをくうけゐうぐせんゐりをてひきゐゝをうろて玉をよけへまうしつゝ
つぐ

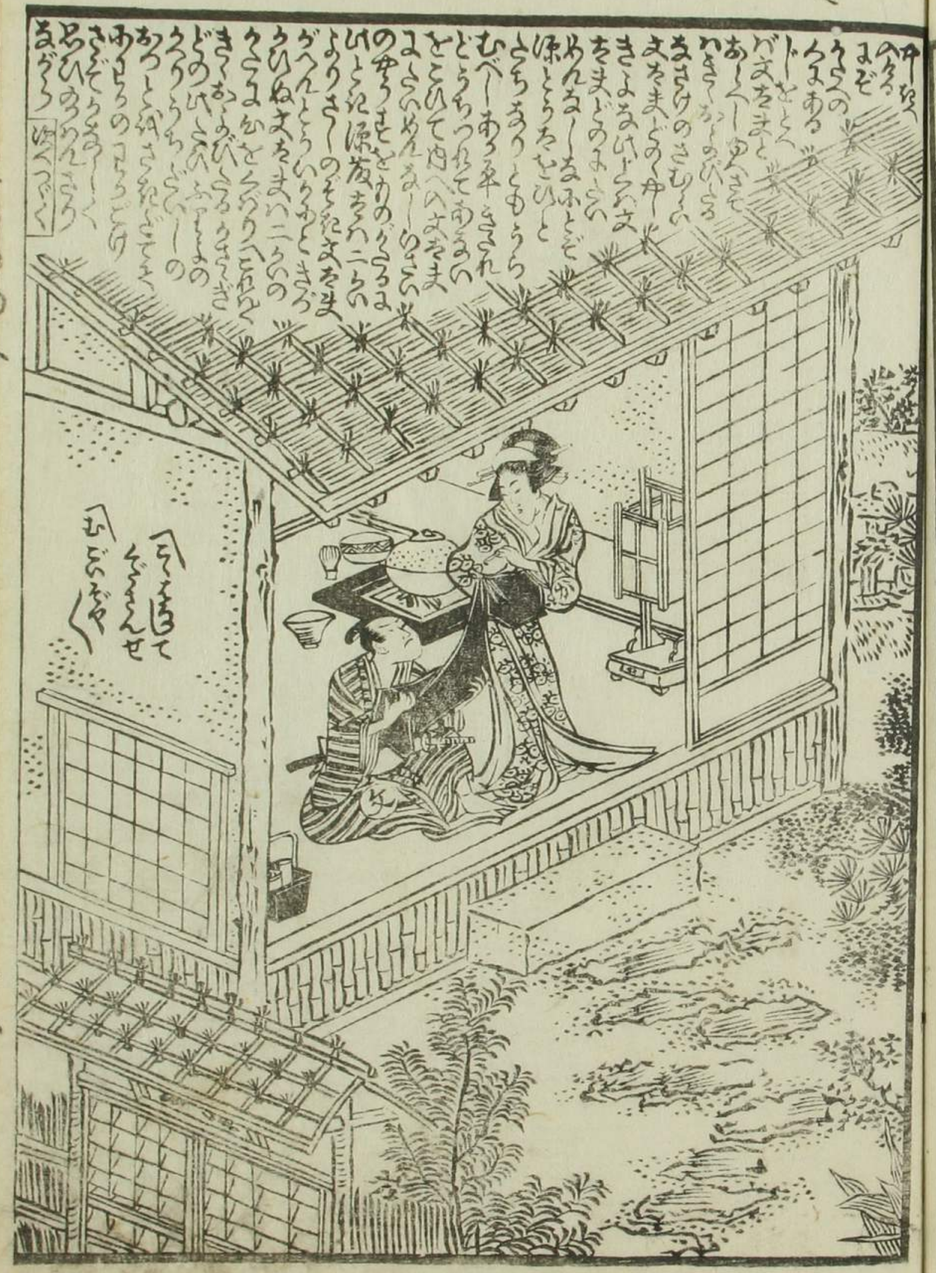
判
あてがく

源義経はあはみがぜにしろよろとびりをきこんで
はきのじょうされびつくりやぎきやうなわわどの
るすあくんやとちくろのうちよりあざこらくひ
しろのろくんをどまのんーふりきくんと
ちくしろはとびりぐーよとびあげられ
ひよろくくとまくのろくんのやうなぐをよ
ろくんちうあーくろのうんアをつの
いちくらんをとくのあとやくーこそれ
ともちくろぎあーふくとくれこのくい
ちぐーのちくろぎあくーぐくちくろぐきかて
ふくちくみちべかのかのまくのくこよ
ちくむ源とうちくんうしろくとべのれ
くこさのつくんをうけしーげくこい
ちくうのいちくうんよをづきくうもし
ちくとおどくろれてくんをどのぐーてさぐう
よるくろのかのれ源とうちくぐとくうんと
ねきあーちくるあーかくよさくるハ
あやーきひとちくをとくんをふやう
あげてひもをとれくうひくうげ
くるまれのくー源とうちくぐんをふ
さんれがびくうくうあどくれひくぐる
ちくどくよいちくるくん中よくひれ
きれーをあくんひとくーくくちふくんく
ちをとくくあくるくんをくーとくんきく
たぐんふくうかんちくんのちをあくくちくさくうね

源義経はあはみがぜにしろよろとびりをきこんで
はきのじょうされびつくりやぎきやうなわわどの
るすあくんやとちくろのうちよりあざこらくひ
しろのろくんをどまのんーふりきくんと
ちくしろはとびりぐーよとびあげられ
ひよろくくとまくのろくんのやうなぐをよ
ろくんちうあーくろのうんアをつの
いちくらんをとくのあとやくーこそれ
ともちくろぎあーふくとくれこのくい
ちぐーのちくろぎあくーぐくちくろぐきかて
ふくちくみちべかのかのまくのくこよ
ちくむ源とうちくんうしろくとべのれ
くこさのつくんをうけしーげくこい
ちくうのいちくうんよをづきくうもし
ちくとおどくろれてくんをどのぐーてさぐう
よるくろのかのれ源とうちくぐとくうんと
ねきあーちくるあーかくよさくるハ
あやーきひとちくをとくんをふやう
あげてひもをとれくうひくうげ
くるまれのくー源とうちくぐんをふ
さんれがびくうくうあどくれひくぐる
ちくどくよいちくるくん中よくひれ
きれーをあくんひとくーくくちふくんく
ちをとくくあくるくんをくーとくんきく
たぐんふくうかんちくんのちをあくくちくさくうね



源



○ひとしよのきてんの金ちう作をなゆて ○京山象刻
水晶印 銅印 古さの近さ
四好牙 ろう石 八一字白字
五ろ朱字七ろ遠ふちろ
印ざらく料



# 山東京山作

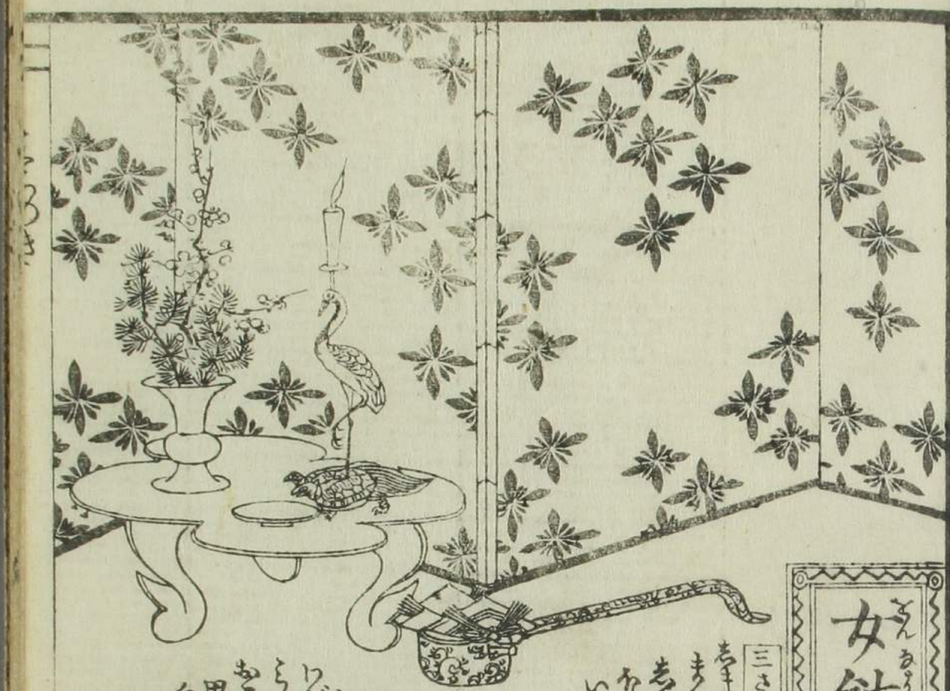
春亭画

つゞき

ゆうさ死うらいくくのの
いまーめとてもえしりぬ
とうらううぐあのりぐさる
天の女をたてーらうーうけ

文をまれ下ニどのよりいりうだられてはるきいあるまいりと日
どろのかよひきうてとくちゆーゆれんがの中くうきて死へ
き中をさ四「これいをりゆふゆふろーゆうぐちうざのれ
ろときてくうのーうゆいーふあんよさうの今うのれことべ
そのれ今ろくゆいうあとくんとまるとひきとうゆいうさ
ま深ようをうまよひーもこうとうてもううーいうゆ
くうちゆ中ろくゆ女房をのうーてゆうどうをゆちいさそ
くゆーうろゆふゆもそううどんづくゆれゆ女房ふゆろ
てさくられるゆくゆあの源ようゆふゆろ三代そうう
あんのゆくーうさゆでもついくびきうてそうくうりよゆやいね
ゆくーんさきうてうさくどきゆくうあんどゆむうくー
ときうんどぜんれとさゆれをゆりゆうくびゆふどる
よりうとゆきゆうどいそれとゆうが今ひいとと
けびよをまうどこうをつうくうきをうくうび
くうさんのうげゆてうやちとのよゆやちうい
さーゆんをまのとうくうでかをとうろゆれーのれこうりれ
さゆうさゆ「うそゆふゆ」ことだ
のゆうくいろそのうどうちよどうてうとゆりふーて
ゆまつよれそひあの松ちうとそでてふうふ
ゆうよーいくーまちよさうゆどうちゆまくの
んだうう「ゆくーうんをのでゆんとちうどい
のとゆゆちよりうといゆくそのの
みとゆの内へりふゆう



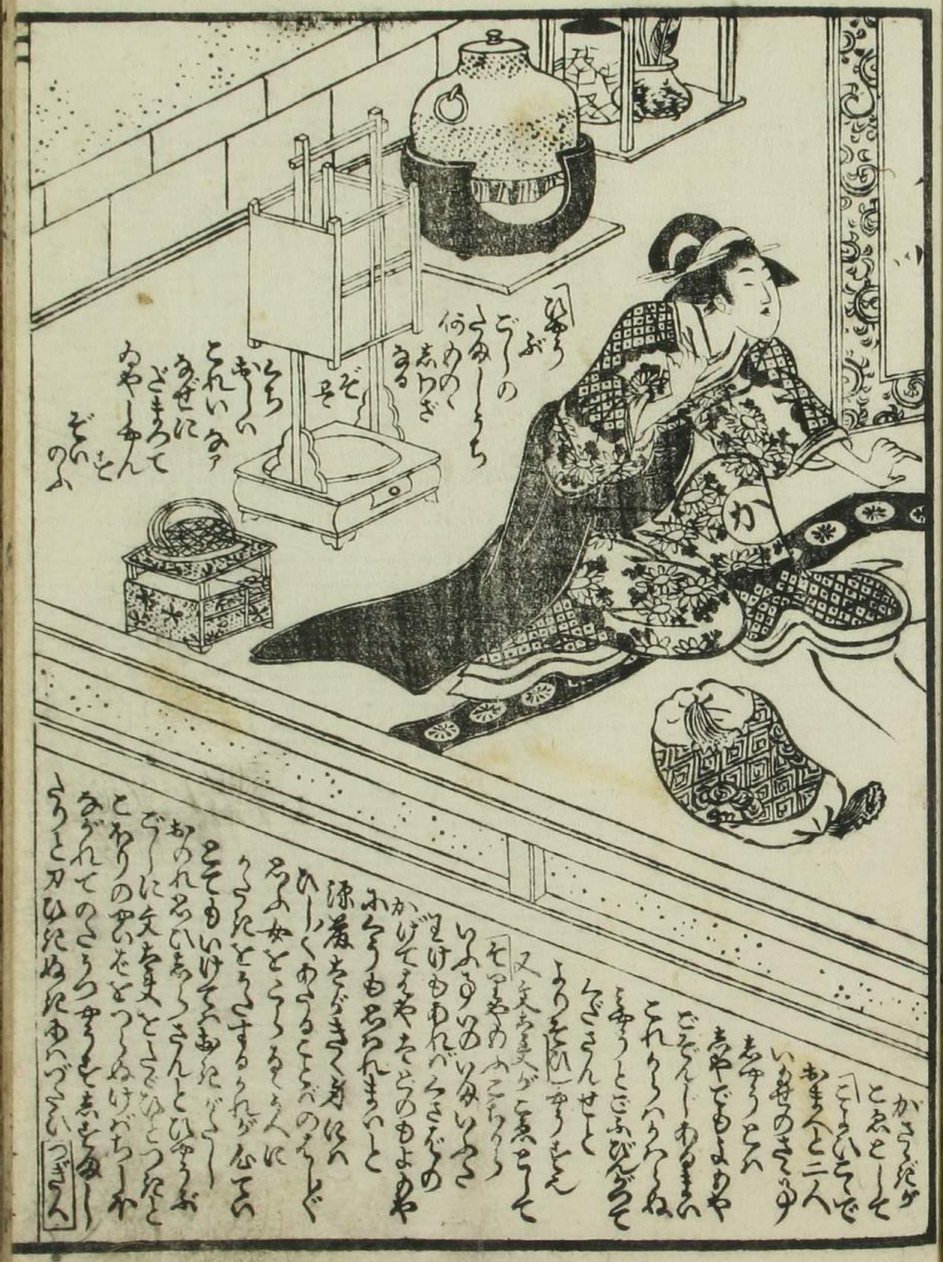


# 女鉢木後編三冊

森治版

三さつ目ろうつぎきのあらし 文をまひとゆ
きまよざのとうやしくさてゆいてかさくぎう
まくにあれ「まれうどそりくんんちうこの
きまらいといんにとゆさいふーんうれ元まれば
ちとゆそゆゆちんちうのつるゆ松と梅とゆ
いけ長いゆうちいにふられどもこれらあゆさの
名中とん「元さちうんの長ゆざいい
ちとけのつるゆどんどゆくまい紙て
たちうどを木でつちうどをちのくうね
あのうさに「ゆんとん「サそのうさちうめの
さうぐきもちをきうーけ三世のこうぐし
土とゆうるそのんへそりーがむゆの
内ゆりゆんゆうとりるとうてざと
松と梅とのうむけざきをのうげん
いびゆりーてうをまてうのゆどれよも
ちーうんゆのいりせるり「ゆきけのゆどの
ちとんびでけさけうーうがむゆの内ゆしとゆふ
男ふふちゆ須であらうともはんんびーて
鬼ちうーこきれゆゆるもゆりゆうへ
ゆわううとげういまんどまんーじ一年ゆゆんに
きまゆうとゆーゆくこれせび文ちを文
「ゆどゆどけてうーびゆうゆの内

文


か

治
赤
か

○源義経

○さのくにのさと

○そこれいさそこにまさ

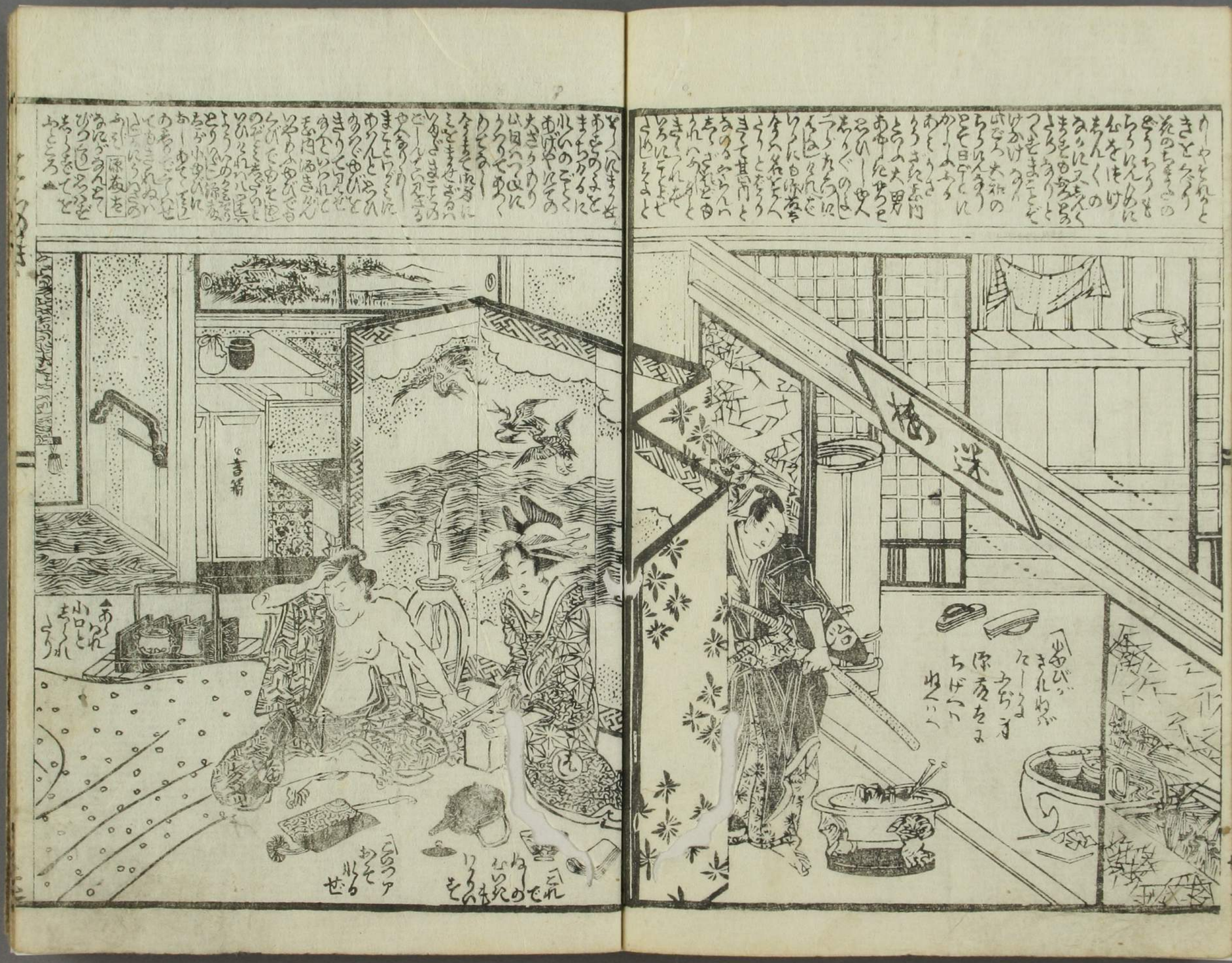
○源義経

治

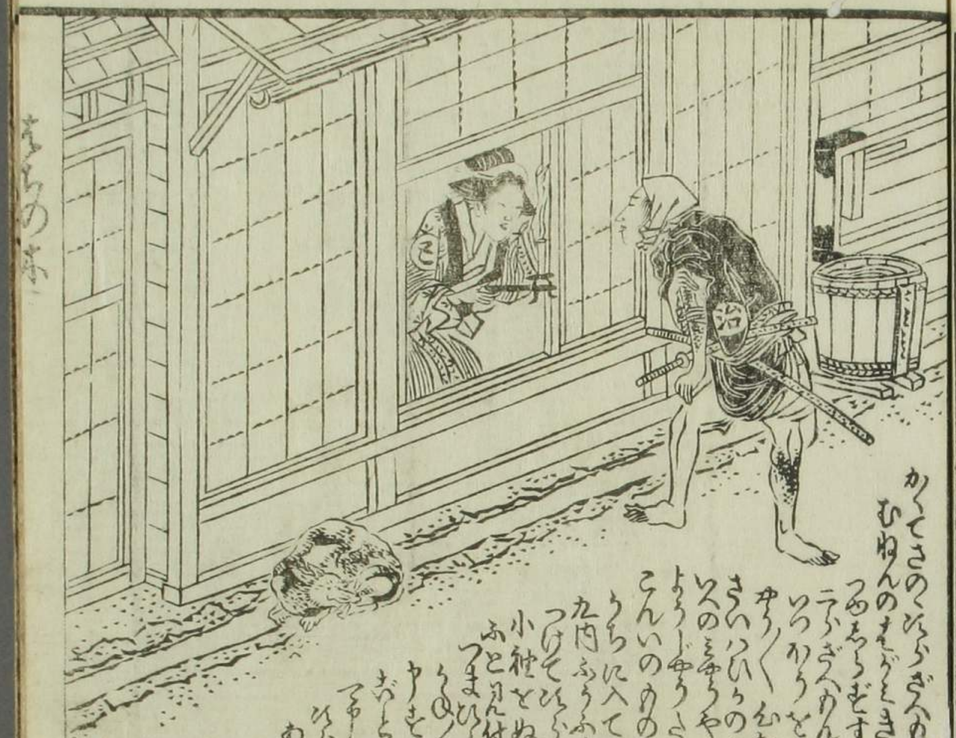
雲龍膏
山本九内
おとし
あさぬ屋
夢羅久

「あんときゆがつぶれんが
「むらうあるさのおろくさとやそとうはしさ
いやうかくしするもいろぐあるさのおろげあらんしうござりまする

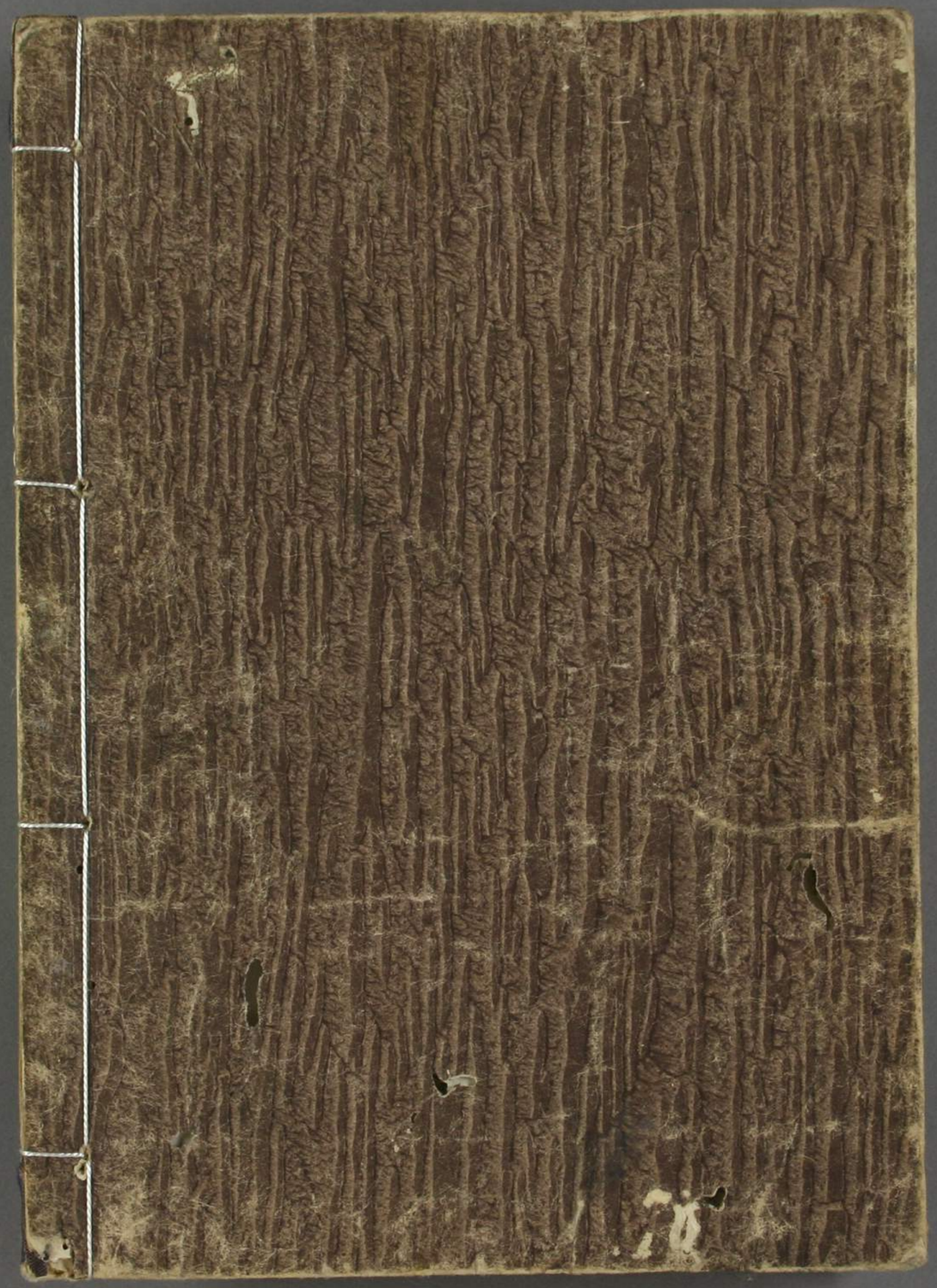
「さてはいろぐとやそのかしにいそのあるごらうにんにそのあるござりまする



津の國神崎の倡家



赤
か

治

文淵廿九年五百八十七